神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

最近のアメリカ黒人文学

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 1966-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 赤松, 光雄, Akamatsu, M メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1988

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

最近のアメリカ黒人文学

赤　松　光　雄

I

アメリカの黒人作家のごく最近の戯曲と小説のなかから，興味深い作品を取りあげて，アメリカ黒人文学の動向を探ってみることにする。もちろん黒人と黒人問題は，アメリカ文学の永遠のテーマの一つであり，このテーマで筆をとる白人作家はますます多くなってきているので，あわせて白人作家の作品も取り上げたいと思う。ここでは著名な James Baldwin や Langston Hughes などのように，さまざまの角度から論じられている黒人作家の作品や，また Julian Mayfield の『偉大なる行進』(*The Grand Parade*, 1962) のようにすでに邦訳のあるような書物は省略して，つとめて新しい作家の新しい作品を選ぶことにする。

黒人作家にとって，従来戯曲は実りの乏しい分野であった。それは彼らの脚本を舞台にのせるのがいちじるしく困難であった理由によるのだが，客観的な情勢の変化につれ，また1959年 Lorraine Hansberry の『ひなたの干ぶどう』(*A Raisin in the Sun*, 1959) がブロードウェーで大当りしたこともあって，黒人を主題にした戯曲がぞくぞく舞台に上り始め，1954年10月には Clifford Odets の『ゴールデン・ボーイ』(Golden Boy, 1937) が原作の主人公であるイタリア系アメリカ人を黒人にかえて再上演されているほどで，黒人作家の芝居が採用されるにしたがい，戯曲でも価値ある作品が生まれ始めたのである。

黒人劇の市場開拓の役割を果した『ひなたの干ぶどう』はシカゴの黒人街

に住む中産階級の黒人一家を描いたもので，現代の黒人文学最高の傑作の一つで，これからの黒人文学に，とくに戯曲の面でかなりの影響を与えるにちがいない作品である。

著者 Hansberry は作家としてのみならず，黒人解放運動や文化運動においてもその発言が注目される立場にあったが，1965年1月将来を嘱望されつつ，34才の若さで他界した。死の数カ月前上演された『シドニー・ブラスタインの窓の中のしるし』(*The Sign in Sidney Brustein's Windows*, 1964) が遺稿になってしまった。

しかし彼女のすぐ後から LeRoi Jones が現われた。劇作家であり，詩人，評論家でもある LeRoi Jones は将来をもっとも期待される一人で，最近は Baldwin 以上にジャーナリズムにも取り上げられるようになった。彼は1934年ニュー・ジャージ州ニューワークの生まれで，ニグロ大学ハワードを卒業後，詩集『20巻の自殺覚え書の序文』(*Preface to a 20-Volume Suicide Note*, 1961) と『死せる講師』(*The Dead Lecturer*, 1964) を書いた。『ブルースの人びと：白いアメリカのニグロ音楽』(*Blues People : Negro Music in White America*, 1964) は，ニグロ音楽を歴史に照らし社会的歴史的なかかわり合いのうちにとらえようとした劃期的な評論である。戯曲2篇を収めた『オランダ人と奴隷』(Dutchman and the Slave) は1964年に出版された。1幕2場の『オランダ人』の舞台は地下鉄の車内，20才の教養の備わった黒人男 Clay が座席についている。そこへ乗りこんできた娼婦型の白人女 Lula が，あれやこれやと甘いことばで彼を誘惑にかかろうとする。やっと仲がよくなってきたと思うまもなく，Lula は急に Clay をあざけったり，ののしったりし始めるので，Clay は日頃からいだいている白人への積りつもった憤りのことばを，まくし立てる。すると Lula は隠しもったナイフを取り出し Clay を刺し殺す。そして乗客に命じて死体を次の駅で車外に放り出すと，Clay に似た青年がまた乗りこんで来て，再び Lula の恰好の餌食として狙われるというストーリーである。構成は単純で，全篇を通じてのせりふは俗

っぽく，しかも卑猥なことばに溢れていてかえってそれが作者の狙う効果を高めている。白人女性に対して欲情をもつ黒人の男が抹殺されるというのはきわめて通俗的なストーリーであるが，それだけではなくそのような類型的な黒人のイメージをつくりあげる白人文化に対する憤りがこの劇にはこめられている。黒人が善良で従順な<アンクル・トム>の身分から一歩踏み出したとたん，白人たちはすべて迫害者になるという意味をこの劇から汲みとるのも容易であろう。更に Jones の怒りは白人文化から逃れることのできぬ黒人にも向けられている。Jones にとってはアメリカ黒人のすべてがさ迷える<オランダ人>で，憎みて余りあるこの<オランダ人>を作者は自らの手によって，殺してしまったのだ。アメリカ黒人の明日の姿の問題をこの劇に織りこんだのである。この戯曲はオフ・ブロードウェーで，1964年3月初演，1963年～1964年度のオフ・ブロードウェーの第9回 Obie Award を獲得した。

2幕の『奴隷』も1964年の12月に舞台化された作品である。これはあたりに砲弾が雨あられと炸裂している邸宅が舞台で，人種暴動の首謀者らしい黒人の男がピストルを構え白人夫婦をおどしている。3人の会話から，この黒人が実は夫人の情夫であること，白人夫婦の2人の娘もこの黒人の子であることが，黒人の口から明らかになっていく。やがて夫は黒人のピストルに胸を打ち抜かれる。一方，至近弾を受けて崩れ落ちる柱の下敷となり息を引き取ろうとする妻に向かって，黒人は子どもたちも殺してしまったことを告げる。'Son of a Bitch. Those black son of a bitch' ということばで幕を開けるが，前作同様に終始猥雑なことばを駆使し，アメリカがもっとも嫌う黒白混交のタブーに挑戦しているのだが，黒人作家でこれほど大胆にこの問題を取り上げたのは Jones が始めてである。しかも血なまぐさい人種暴動を背景にした点，白人の主人公一家を余りにも無慈悲に扱っている点，数年前ならば，恐らく<黒い回教徒>が寺院で演じる芝居と思われるであろうほどの白人への憎悪がふつふつと燃えたぎっている。凄まじいばかりの復讐である。

60年代の人種関係の険悪な空気のなかに，憤りの作家 Jones が書いた実験的な作品である。

Ossie Davis は，ジョージア州ウェイクロスで生まれ育った。ハワード大学を出てから俳優となったり，戯曲を習作したりしていたが,『パーリー・ヴィクトリアス』(*Purlie Victorious*, 1961) の一作を仕上げて抗議派の黒人文学に新風を送りこんだ。1961年9月開演の舞台で，彼自身主役 Purlie を演じ，妻が舞台でも恋人役をつとめた。これは営業的にも大成功し，内容が内容だけに，この芝居ばかりは黒人客が圧倒的に多数を占めた。『パーリー・ヴィクトリアス』は3幕の喜劇。時代は1960年ごろと推察される。舞台はジョージア州の綿花農園で，主人公一家が住む掘立小屋と，彼らが日常必需品や食料を買わされる大旦那経営の売店である。Purlie は1960年代の新しい民族意識をもった青年で，彼の恋人が死んだ従妹にうり二つなところから，従妹に化けさせ，大旦那に甘言をもって近づき，半奴隷的な生活から家族全員の自由が買える500ドルをせしめようとする。ところが化けの皮がはげ大騒動になるが，結局，大旦那の息子が援助の手を差し伸べてくれる。すなわち500ドルを父から盗みその上牧師志望の Purlie に父の名儀で教会を買ってやり，はては教会に加入したいと申し入れる。父は憤激のあまり，立ったままで往生する。Purlie の現代的なセンスの洒落とウィット，無知でお人好しの彼の恋人と大旦那の間に交されるとんちんかんなやりとり，絶えずフォスターの歌を口ずさみ大旦那につきまとう黒人の腰巾着ぶり——観客は絶えず笑いに誘われるであろう。けれども本来尊厳で侵すべからざるはずの南部貴族の大旦那が，権威の座から引きずりおろされる憐れむべき小人物になりさがってしまう。本当の可笑しさはそこにある。従来の黒人抗議文学では南部農園主はこの大旦那のような喜劇的タイプに描かれたことはなかった。これは黒人文学の一つの脱皮と見られよう。また大旦那の息子もこれまでに殆んど登場しなかった新しい型の白人青年に扱われている。南部の黒人の解放運動にアイデンティティを発見しようとするこの作者は，エピローグの葬儀のシーン

で,「私の友よ，今夜，私は黒いということに美しさを見出している。それは喜びであり，力であり，嬉しいひそかな杯なのだ。時と所を越えた故郷——あらゆる黒人の顔にある故郷なのだ」[1] とのべているが，単なる不正への抗議よりむしろニグロ民族への信頼と自信が作品を支えているのが，Hansberry やこの Davis の作品の特徴である。

同じ傾向の作家に Loften Mitchell がいる。南部の公民権闘争をテーマにした『彼岸の地』(*A Land Beyond the River*) は注目すべき作品のようであるが，くわしくは分らない。現在ボードビリアンで著名な Bert Williams の生涯を取りあげた『朝の星』(*Star of the Morning*) に取り組んでいる。

II

黒人作家の最近の小説に移ると，『征服者の最後』(*The Last of the Conqueror*, 1948,『黒人大隊』の題で邦訳がある) で知られる William Gardner Smith が第4作に『石の顔』(*The Stone Face*, 1963) を出した。物語はアメリカ黒人の画家 Simeon Brown がパリへ行く車中から始まる。フィラデルフィアで過した少年時代に，お使いに行く途中出くわしたポーランド系の白人 Chris から，たわむれに片眼をえぐり取られてしまった Brown が，以来白人からひどい仕打ちを受けると，その白人の顔が感情のまったく欠けた Chris の＜石の顔＞の形相となって，主人公をさいなめる。そこで＜石の顔＞から脱れようとパリへ来るのだが，アメリカから来ている黒人や各国の人と付き合っているうちに，表面は自由なパリでも差別があることを体験する。主人公たちは白人の扱いを受けるのに反し，アルジェリア人がここでは＜黒んぼ＞であった。そこで人種的社会的差別は世界のどこにでも存在することを覚り，虐げられた少数民族のアルジェリア人の抵抗の姿に感動した主人公は，＜石の顔＞とたたかう決意をかためてアメリカへ帰ろうとするところでこの小説は終っている。作者はアメリカで過した少年時代の差別体験の

(1) Ossie Davis, *Purlie Victorious*, (New York, Samuel French, Inc., 1961) p. 144.

回想と，フランス，ヨーロッパ，北アフリカの各地の主として人種問題にかかわる事件や，エピソードとを，交錯させながら，手際よく次々と読者に提示していく。遺憾ながら，Simeon を始め，ポーランド系のユダヤ人の恋人，この二人と接触する多数の人物，だれもが観念的で生きていない。これは致命傷であるが，アメリカ黒人の問題を広い視野に立って世界的な被圧迫階級全体の問題としてとらえようとしているのは黒人文学の一つの新しい姿勢であって，高く評価すべきである。

『石の顔』の正反対の極に位置する『使い走り』(*The Messenger*, 1963) は Charles Wright の半自伝的な処女作である。Wright はミズリー州ニュー・フランクリンの生まれで同地の高校を中途退学し，ニューヨーク市に赴き，使い走りやその他の雑多な仕事をやりながらこの小説を書いた。作中の私 Charles もマンハッタンの安アパートに住んで使い走りをしている29才の黒人青年である。一貫したストーリーはない。孤独な主人公の日常生活と過去の想い出が断片的に淡々と日記体風に描かれたり，あるいはそれ自身巧妙にまとまった短篇小説のように物語られる。William Gardner Smith の興味とは逆に，国連で黒人が騒いだ新聞記事が目にとまっても，ハーレムの街角でニグロ民族主義者の演説が耳に入っても，殆んど彼は興味を示さない。「彼ら〔白人〕の凝結した精液…どうしてそれは彼らの民族のなかにとどまれなかったのか！　そのためにぼくはアウトサイダーなのだ。少数民族なのだ」[(2)] と考える主人公 Charles にとって黒人であることは，あがいても，もがいてもどうしようもない宿命で，疎外意識をつのらせる一つの条件にすぎないのである。そこで生きる証しをえようとして主人公は性の世界に埋没する。セックスの場面，とくに同性愛の場面が必要以上と思われるほどくり返される。この点では Baldwin の *Another Country* と似通っているようである。けれども作者の文体は明らかに Hemingway の強い影響を受けていて，熱っぽいいらだった Baldwin の描写とは対照的に，作者の心情にふさわしい飾らぬ，

(2) Charles Wright, *The Messenger*, (New York, Farrar Straus & Co., 1963) p. 144.

落着きのある文章で，ニューヨークの都会の憂愁を浮かびあがらせている。

短篇集『浜辺の踊り子』(Dancers on the Shore, 1964) の著者 William Melvin Kelly は1937年，ニューヨーク市の生まれで，ハーヴァード大学卒業後小説の筆をとり，在学中から数々の文学賞を受賞し，長篇『別の太鼓』(*A Different Drummer*, 1962) で大好評を博した。最近，盲目の黒人ジャズ音楽家をテーマに『忍耐のひとしずく』(*A Drop of Patience*) を書いた。短篇16篇をおさめた『浜辺の踊り子』の前書きで，作者は「…人間には扮装したシンボルや思想を描くのではなく，人間を描かねばならない，私はアメリカの黒人である。私は自分が作家でありたいと願っている。だがそれを判断するのは，恐らく私ではあるまい」と言っている。一，二篇拾いあげて見ると，'Not Exactly Lena Horne' は，鉄道会社を退職した独り身の黒人の老人どうしが，ロング・アイランドの粗末な木造家屋に住んでいる。その一人がつれづれの余り，毎日ヴェランダに出ては行き交う自動車の鑑札の州名を目で追い，ノートに州名の合計を書き留める。もう一人もなんとなくそれに付き合って，20年間いっしょに暮してきた。たまたま昨夜のリューマチのおかげで大喧嘩になるが，それでもなんとなく丸くおさまるというストーリーである。温かい筆で，ユーモアたっぷりに機械文明を諷刺しながら，老人のやりきれない退屈さ，わびしさを描き出している。'Enemy Territory' では白人の子にいじめられてお使いができないで帰ってきた坊やを，祖母が祖父の写真の前に坐らせて想い出を聞かせる——キューバ生れのおじいさんがバーでお酒を飲んでいると，アイルランド人のバーテンダーがキューバ人の口をつけた杯は不浄だという理由からその杯を割ってしまう，おじいさんは主人に飛びかかっていったのだ——坊やは再び，今度は胸をはってお使いに出て行く。黒人作家が人種問題を語る際陥りがちな肩をいからし，悲憤慷慨する調子を少しも見せない。'Cry for Me' は少年の語り手が,「綿花畑のブルース」と，黒人の伝説的英雄「ジョン・ヘンリー」のレコードはぼくのおじさんの吹き込みで，これを見るとおじさんを想い出すと前置きをして，南部からニ

ューヨークへやって来たおじさんの話をする。グリーンウィッチ・ヴィレッジで南部の歌をうたって聴衆を魅了したことから，カーネギー・ホールの檜舞台にのせられ南部の黒人の歌をうたい，興奮してしまった聴衆がみんな舞台に上って踊り出すが，生命を燃焼してしまったおじさんはギターを手にしたままで息絶える。彼は8フィート近い大男で，ウクレレのように小さく見えるギターを左右の手にかかえて演奏しながら，破れ鐘のような大音声で歌う超人だが，性格は朴訥な南部黒人である。アメリカ文学の伝説のほら話と，こっけいなニグロ・ユーモア話のうつわに，目覚めた南部黒人の誇り高い精神を盛り上げている手腕は見事である。この短篇集のすべてがそうではないけれども，少くとも数篇は Kelly が短篇作家としてのすぐれた才能の持主であり，＜アメリカ黒人であって，何よりも作家である＞ことを証明している。

このほか，朝鮮戦争の復員兵が南部の小さな町で選挙登録をしようとして迫害に会う Junius Edwards の『われ死ぬとも』(*If We Must Die*, 1963), カンザス州の田舎町を背景に，公立学校の共学問題や，人種問題がからむ殺人事件をおりこんだ Gordon Parks の『学びの樹』(*The Learning Tree*, 1963) の長篇小説があるが，前者は文体と人物の性格づけに難点があり，後者は事件に真実性が薄く，会話の運びが冗長で，また全体のプロットに無理があって，文学作品としての価値はないように思われる。

永い間沈黙を保っていた著名なニグロ作家たちの書物が，ごく最近，せきを切ったように出始めた。Ralph Ellison の『影と行為』(*Shadow and Act*, 1965) は大戦後から現在にいたるエッセイ・インタビューの類を一冊に収録したもの。女流作家の Ann Petry は1695年の魔女裁判で魔女と宣告されたバルバドスの奴隷を描いた小説『セーラム村のテュテューバ』(*Tituba of Salem Village*) を完成し，『ビートル・クリーク』(*Beetlecreek*, 1950) の William Demby は『地下埋葬場』(*The Catacombs*, 1965) を書いたが，これは1947年以降イタリアで暮し，4,5年前に帰米した作者のこの間の自伝的

要素の濃い小説である。『これも私の国』(*This Is My Country Too*) という合衆国横断の旅行記は，これまで『夜のうた』(*Night Song*) (1961) ほか数篇の小説を書いている John A. Williams が作者である。

Ⅲ

白人作家による小説では，ハーレムの非行少年の生態を赤裸に描いた『クール・ワールド』(*Cool World*, 1959) の作者 Warren Miller が，やはりハーレムを舞台に『ハーレムの包囲』(*The Siege of Harlem*, 1964) を書いた。この小説は『アンクル・リーマス』を意識的に真似て，ある老人が毎夜，近所の子どもたちに昔の想い出話を聞かせるという形をとっている。ここのハーレムは4分の3世紀前に<特権人種>，<多数派の人びと> (Privileged People, Majority People) から独立を宣言していて，当時親衛隊員として首相官邸<ブラック・ハウス>で親しく建国の父たちに接していた老人が，建国から1周年を迎えるまでの彼らのエピソードを聞かせようというのである。耳を傾ける子どもらはンゴモ，セク，エンクルマ，ジョモなど，アフリカ新興諸国の元首をかたどった名がついている。ハーレムの住民たちは<多数派の人びと>の政治上の懐柔政策にだまされず，経済封鎖のための飢えと寒さにも堪えるのである。けれども作者の力点はむしろ要人たち，すなわち高潔な首相，その美しい妻，首相のおいの青年外相らの三角関係の個人的悲劇を追うことにおかれているため，抒情的な美しさは漂ってはいるものの，このアレゴリカルな設定の意図がぼやけてしまった。ハーレム住民の国づくりの努力や苦心，夢や理想に焦点を合わせることも可能ではなかったか。第一作でのきびしい姿勢はくずれ，<クール・ワールド>からの脱出に終ってしまった。

『チャップマン報告』(*The Chapman Report*) や『賞』(*The Prize*, 邦訳『ノーベル賞』) で物議をかもした Irving Wallace が,『その人』(*The Man*, 1964) ではじめて人種問題を扱った。テーマがセンセーショナルゆえに発行

の年の暮れから半年以上にわたってベスト・セラーの上位を保った小説である。ストーリーはジョンソン大統領の次の大統領が外遊し，フランクフルトのある会堂で演説中，老朽建物のために天井が崩れ落ちて不慮の死を遂げる。側近の要人は下院議長をふくめて全部亡くなる。副大統領はすでに病没していない。正当な大統領後継者は，予想もしなかった上院議員の Douglass Dilman だと判明した。高いひたい，ふっくらと広い鼻，ぽってりと突き出たくちびるをした Dilman が急いで大統領の宣誓を終え，黒人居住地区からホワイト・ハウス入りをするに及んで，世情騒然となる。黒人初の大統領は有能で，強固な意志をもって勇敢に職務を果そうとするので，大統領は秘書を強姦しようとしたとか，ある未亡人と不義の関係にあるなどというさまざまな罪状をでっち上げ，彼をその職から失墜させようとするあらゆる迫害が降りかかるのである。

作者は本扉と本文の間で，黒人解放の指導者 Frederick Douglass のことばを引用している。要するにそのことばは，アメリカ政府は国民の自由・平等の権利を保証すべしという建国の理想をうたったものである。恐らく主人公の Douglass という名はこの英雄的人物から取ったのであろう。建国の理想と黒人の現状との間には恐ろしいほどの隔たりがある。黒人大統領の誕生という想定は，かなりのアメリカ白人にとっては堪えることのできないもので，Wallace の小説は，黒人問題の解決に関してアメリカ社会に真の態度決定を迫った踏み絵であるという点に意味がある。この点で Sinclair Lewis の『王家の血』と類似性が見出される。このベスト・セラー作家はジャーナリスティックな筆の運びをもって，黒人が大統領の職につけば政治的に社会的にいかに激しい恐慌をもたらすものであるか，それが波及する現象を作者は余すところなく克明に描こうとする。

直接黒人を扱ったのではないが，John Hersey が『ホワイト・ロータス』(*White Lotus*) という問題作を書いたと報じられている。[(3)] アリゾナ州の田舎

(3) *Freedomways*, (New York, Freedomways Associates, Vol. 5. No. 3, Summer, 1965) p. 435–436.

で平穏に暮している白人の娘のもとへ<黄色い人> (Yellows) が攻め寄せ，娘を始め多数のアメリカ人を捕え，奴隷船に乗せアジアへ連れ去り，強制労働を強いるという筋書きである。白人を奴隷化するという極端な方法によって奴隷制の意味をアメリカ白人に知らせようとした記念碑的な作品と Loyle Hairston[(4)]はいっている。或いは何よりも中国への恐怖感に触発されたのかも知れないし，アメリカの黒人が世界の有色人と手をつなごうとする動きが，奴隷制と黄色人を結びつかせる発想となったのかも知れない。著名な南部作家 Erskine Caldwell には，最近の南部の旅行をもとに，黒人問題について意見をのべた『ビスコを求めて』(*In Search of Bisco*, 1965) がある。

戯曲では Martin B. Duberman の2幕の『白いアメリカで』(*In White America*, 1964) が感動的な史劇である。1963年10月，オフ・ブロードウエーの劇場で上演されている。良心的な史家の筆になる，この戯曲は狭い意味では創作ではない。アメリカ黒人の抑圧されてきた歴史をテーマにし，奴隷船上での惨状から解放宣言までを第1幕に，解放後からリトル・ロックまでを第2幕に，自叙伝や体験記や旅行記やその他新聞，雑誌などから黒人の苦難に満ちた歩みをつづったもので，材料は手際よくナレーターによってまとめられていて，ドキュメンタリー劇としては最高の出来栄えである。その成功は一つには黒人の歴史自体のもつ迫力が読む人の心に強く訴えるからでもあろう。

Peter S. Feibleman の『虎よ虎，明るく輝け』(*Tiger, Tiger, Burning Bright*, 1963) は小説『夕暮のないところ』(*A Place Without Twilight*, 1957) の戯曲化で，62年の暮，ニューヨークで上演された。ニュー・オーリアンズ郊外の黒人一家を描くものだが，この主人公一家が黒人であるのは，先の Odets の『ゴールデン・ボーイ』が黒人であるのと同じ理由によると思われ，黒人である必然的な理由に乏しい。

ここに取り上げた作品は Hansberry の『ひなたの干ぶどう』，Davis の『パーリ・ヴィクトリアス』が少し古いほかは，いずれも1963年以降の出版

---

(4) *Ibid.*

である。1954年の5月，公立学校の人種隔離は違憲であるとの最高裁の決定がくだったのを契機に，黒人解放の運動は新しい段階に入ったが，解放宣言百年を迎えた1963年，黒人の攻勢はもっとも熾烈化した。黒白の人種関係は極度に緊迫し，緊張した状況になっていった。こういう社会情勢のもとに書かれたものである。

白人作家のこの時期の作品は Miller の『ハーレムの包囲』，Wallace の『その人』，Hersey の『ホワイト・ロータス』など，人種間の険悪な緊張状況を異常に強く反映している。ある作家は堪え切れなくてそこから脱出しようとし，あるいは進んでその状況に身をおこうとする。Wallace, Hersey, Duberman のように，黒人問題の意味をアメリカ民主主義とのかかわりにおいて，もう一度真剣に追求しようとする作品も多く，この傾向はこれからもつづくであろう。アメリカの白人は，これまで従順なアンクル・トムと見ていた黒人が，突然，恐るべき怪物のように巨大な姿を現わしたことに，目をみはり，とまどい，おびえている。そうした狼狽を白人作家の作品に感じとることができよう。過去のアメリカ文学においても，黒人像はあまりにも歪曲された存在であった。Wallace の『その人』の黒人大統領などもやはり観念的な類型的な黒人に描かれていて，とくにこの主人公を性と結びつけている点にも，作者の抜きがたい偏見がこもっているようである。Baldwin が数々のエッセイのなかで，あるいは先の Jones が『オランダ人』のなかで挑戦しているのは，こうした黒人像の破壊である。真の黒人像の創造は，白人作家に期待すべきことでもあるが，だれよりも黒人作家自身の課題の一つである。

黒人作家のほうでも，劣等観を裏返しにしたような自己主張や抗議はすっかり影をひそめた。Kelly, Davis, Smith らのように，自己あるいは民族への信頼，自信に満ちた作品が出始めた。もっともその反面には，黒人や人種問題という自己の問題を放棄した Willard Motley や Frank Yerby のような作家もいる。C. Wright のような実存主義的な若い作家もいる。Baldwin

の場合でも，小説にかぎらず彼の最近の発言は，ニグロ民族にアイデンティティを求めないで，アウトサイダーの傾向が強まってきた。むろんこれらの作家たちは，人種をこえて現在の状況を語るにふさわしい有利な視点をもっているわけである。けれども，アメリカの黒人全体が<隔離>から<統合>への曲り角へ急速にさしかかっている現在，黒人文学はいかにあるべきかということは大きな問題を提起している。民族的な Davis, Mitchell, Julian Mayfield（亡くなった Hansberry もそうだったが）らは，アメリカ社会への無条件の同化に対し，またアウトサイダーの Baldwin らに対しても批判的である。彼らはアメリカ文化のなかにありながら，常にそこからはみ出していたニグロ民族に立ち帰って，反体制的な立場をとり，アメリカ文化のなかに真に独立した位置を占めようとする点では共通したものを持っている。しかし，それが文学的にはどう生きてくるかは，まだこれからの問題である。